

第三節 遺 跡

1 六甲山南麓の遺跡

この節では、市内で発見された古代から中世にかけての主な遺跡を紹介する。

六甲山地南麓は、大阪湾沿岸の東西に長く広がる平地地域であり、東灘・灘・中央・兵庫・長田・須磨の各区を含む。市内で最も早く市街地化の進んだ地域であり、律令期以降、山陽道・西国街道などの陸上交通路、また敏馬埼や大輪田泊、兵庫津といった海上交通の要衝として繁栄して来たと伝えられている。

古代、この地域は旧撰津国における菟原郡および八部郡であり、東灘区住吉から御影付近、長田区周辺がそれぞれ郡衙推定地となっているが、未だ確証を得るにはいたっていない。その他、官衙関連では、山陽道の芦屋駅家と考えられる深江北町遺跡、須磨駅家と考えられる大田町遺跡が挙げられるほか、銅鏡や銅製帯金具が出土している上沢遺跡が注目される。

平安時代末期には平清盛ら平氏一門が、兵庫区上祇園町付近に別荘を築き、治承四年（一一八〇）には福原遷都が計画されており、祇園遺跡では庭園遺構が、楠・荒田町遺跡では大規模な溝が見つかるなど、当時の平氏の隆盛を偲ばせる遺構、遺物も周辺の遺跡から発見されつつある。

深江北町遺跡（東灘区深江北町）

深江北町遺跡は神戸市域の東端、芦屋市との市境付近に広がる遺跡で、標高約三メートルの砂堆上に立地する。平成十二年（二〇〇〇）度に実施した第九次調査は民間共同住宅建設に伴うもので、調査地区の西半部では奈良時代前半〜後半の掘立柱建物・溝・土坑などの多数の遺構が確認され、東半部は全域が流路となっている。出土遺物には木簡のほか木製品多数（皿・下駄・斎串・人形・用途不明品など）とともに墨書土器を含む須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁などのほか、芦屋廃寺遺跡と同範の軒瓦を含む瓦や馬歯などがある。

木簡には「承和」（八三四〜四八）銘で、『新撰姓氏録』にみえる「芦屋椋人」との関連が想起される「椋人」の芦屋郷内での米の受け渡しを物語る支給伝票木簡のほか、呪符木簡、荷札木簡などがある。また、墨書土器が約四〇点出土し、「驛」七点のほか、「大垣」「東」などもある。「驛」の墨書土器がまとまって確認できたことは、深江北町遺跡が古代山陽道の「葦屋駅家」に関連する官衙関連の遺跡として評価でき、確認できた掘立柱建物は駅家に関連した遺構の一部と考えられる。

「驛」の墨書土器がまとまって確認できたことは、深江北町遺跡が古代山陽道の「葦屋駅家」に関連する官衙関連の遺跡として評価でき、確認できた掘立柱建物は駅家に関連した遺構の一部と考えられる。

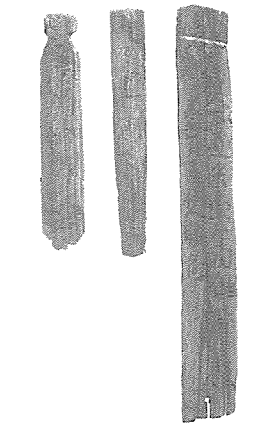


写真233 木簡（右が支給伝票木簡）

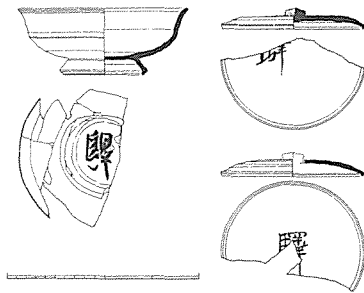


図98 墨書土器『驛』

郡家遺跡（東灘区御影町御影・同郡家、御影中町）

郡家遺跡は、石屋川の扇状地に広がる遺跡である。昭和五十四年（一九七九）春、宅地造成に伴う緊急発掘調査において発見された。「郡家」という地名は古代郡衙の故地を示すと考えられ、小字として周辺に残る「大蔵」「室内」など郡衙関連の地名も注目されてきた。郡家大蔵地区で実施された発掘調査では、南北八メートル、東西五・五メートル以上のほぼ棟方向を真北に採る掘立柱建物一棟が発見された。掘立柱建物の柱掘形は〇・八メートルを超えるものもあり、奈良時代の須恵器環・土師器などが伴出し、奈良時代の公的な施設であると推定され、当地が菟原郡衙の一部に当たる可能性もでてきた。

以後、郡家大蔵地区では、第二次調査でほぼ棟方向を北に採る掘立柱建物一棟が発見されている。この掘立柱建物の時期は出土遺物から平安時代前半と考えられている。このほか、下山田地区では、大蔵地区第二次調査と同様に平安時代前半の掘立柱建物が三棟検出されている。これらの掘立柱建物は、コマまたは口の字状に整然と建物配置されていた。このように計画性を持った大型掘形を持つ建物群は、遺物包含層内から灰釉陶器や緑釉陶器が出土していることから、平安時代の郡衙の一部である可能性がある。



写真234 郡家遺跡下山田地区掘立柱建物群

住吉宮町遺跡（東灘区住吉宮町）

住吉宮町遺跡は、住吉川と石屋川によって形成された扇状地末端付近に立地する弥生時代中期から室町時代にいたる複合遺跡である。住吉東古墳や坊ヶ塚古墳を含む古墳時代中期～後期の古墳群が著名だが、古代・中世の様相も近年徐々に明らかになりつつある。平成八年（一九九六）の調査では文禄五年（一五九六）の伏見地震により井戸枠の上半分が崩れた奈良時代の井戸が検出され、中から「橘東家」「免」の墨書のある土師器坏が出土している。付近から土馬瓦、円面硯などが出土しており、菟原郡衙に関連するものと考えられる。平安時代では広範囲に掘立柱建物が検出されている。第一次調査では、九世紀～十世紀初めの掘立柱建物に伴う地鎮遺構が、二カ所建物の東南隅付近で発見された。ひとつは、七個の小壺を一列に並べ二枚の土師皿で蓋をしたもので、密教における七宝を意識したものとも考えられる。もうひとつは、須恵器の小瓶を土師器坏で蓋をし、傍らに土師器一枚を重ねて伏せ置いている。中世以降では、遺物は出土するものの建物などは明確ではない。生産に関わるものとして室町時代の採石跡が見つかっている。

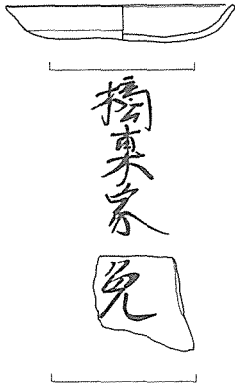


図99 井戸出土墨書土器



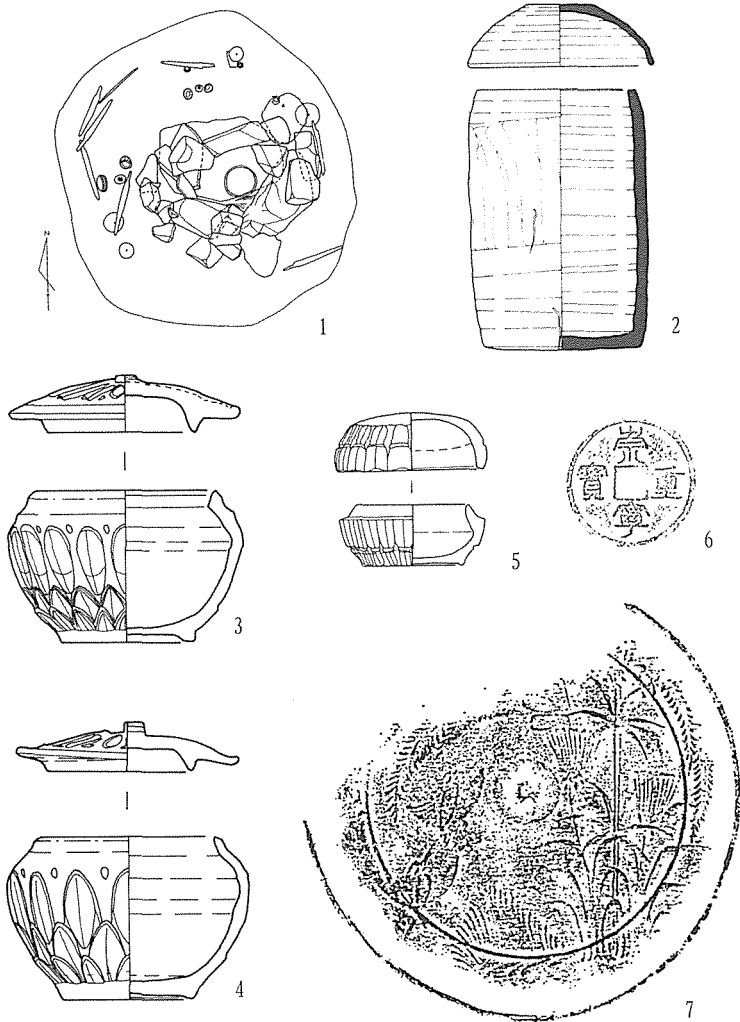
写真235 地滑りで移動した井戸

滝ノ奥遺跡（灘区高羽）

遺跡は灘区高羽字滝ノ奥にあり、国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地の南約三〇〇メートルに位置する。平安時代の経塚・掘立柱建物、鎌倉時代の礎石建物、室町時代の火葬墓などが検出され、三彩系陶器片・緑釉陶器・灰釉花瓶・黒色土器や軒丸瓦などが出土している。経塚は調査区北端で見つかった二間×三間の掘立柱建物の西側に位置する。本来一辺約三・八メートルの方形または台形の盛土を持つと考えられるが、上部は削平を受け明確ではない。経筒埋納用の石室は、一・一×一・四メートルの土坑中央やや東寄りに、花崗岩礫により構築された内法長約二〇×三〇センチメートルのものである。経筒は東播系須恵器で、蓋は同系捏鉢に転用している。経筒内からは経巻の出土はなかったが、金銅製独鈷杵一が残存していた。石室内から和鏡六、石室掘形から和鏡五・青白磁合子三・同壺形合子二・白磁壺形合子一・鉄製刀子八・ガラス製数珠玉三が出土している。経塚の築造時期はこれらから見て、平安時代末（十二世紀中頃）と推定される。

石室出土の和鏡は、経筒と石室の間隙に立てて埋納されており、その内訳は草花双鳥文鏡、草花蝶鳥文鏡、山吹双鳥文鏡、網代蝶鴛鴦文鏡、網代蝶鳥文鏡、草花文方鏡である。掘形出土のものは蝶双鳳文鏡、草花双鳥文鏡、松喰鶴文鏡、草葉双鳥文鏡と蝶鳥文方鏡である。石室内出土の和鏡のうち山吹双鳥文鏡には「女清原氏」の、網代蝶鳥文鏡には「平野女王遺」の針書があり、経塚内出土の和鏡の内三面には和紙が付着し、紙に包んで埋納されたことが分かる。その他、経塚横のピットからは青白磁合子片三個体分と松喰鶴文鏡、経塚周辺から瑞花双鳥文八稜鏡が出土した。また、石室を覆っていたと考えられる栗石内から北宋の崇寧重宝当十銭（一一〇三年初铸）一と鍍金鳳凰形飾金具一が検出されている。

第三節 遺 跡



1: 経塚平面図 S=1:40 2: 経筒実測図 S=1:8 3~5: 青白磁合子 S=1:2
6: 崇寧重宝 S=1:2 7: 草葉双鳥文鏡 S=1:2

図100 経塚平面図ほか

日暮遺跡（中央区日暮通ほか）

日暮遺跡は、古代～中世当時の海岸線に近い扇状地末端から低位段丘上に立地する。これまでの調査で、弥生時代後期末から古墳時代、奈良時代から平安時代の集落跡が発見されており、時代によって集落の位置が変遷していることが判ってきた。

奈良・平安時代前半の集落跡は、遺跡の東半部で確認されており、束柱を持たない二間×三間から三間×四間程度の掘立柱建物が、数棟ずつのまとまりを持ちながら集落を構成しているようである。

遺跡の推定範囲ほぼ中央の第一次調査地点では、平安時代後半から末期の掘立柱建物が重複して発見された。一定の範囲内で建物が建て替えられていることから、屋敷地としての区画が設定されていた様子が判る。また、皇朝十二銭や甕を用いた地鎮遺構が調査区内で六カ所、確認されており、建物建築に際して地鎮めのまじないが、さかんに行われたことを物語る。

これまでの調査で、漁網に用いる各種の土錘や飯蛸壺などの漁撈具きょうぐが多く出土し、海と何らかの関わりを持った人々が居住していたと推定される。

また、この遺跡では、灰釉・緑釉陶器の出土量が多く、中国産の越州窯青磁が発見されることなどから、安価ではなかったこれらの品物を手し得た人々が、居住した集落跡であることが窺える。



写真236 日暮遺跡第1次調査地点遠景

下山手北遺跡（中央区下山手通）

宇治川左岸、南の平野部を見晴らす丘陵末端に位置する。平成七年（一九九五）に第一次調査が、平成十七年にその南で第二次調査が行われた。当地は西に宇治川が流れ、旧村名に宇治野村の名が残り、撰津国の宇治郷に属したと推測できる。宇治川右岸は平安時代末期に平家一門が別業を構えた福原荘で、さらにその西、湊川右岸海浜沿いが輪田荘。第一次調査では、平安時代初期の邸宅が確認された。屋敷地は半町四方とみられ、主屋の南側に南北棟を左右に配し、これが渡殿でつながれる。主屋柱穴から嘉祥元年（八四八）初鑄の長年大宝五九枚が出土している。敷地の南では園池、また門跡と推定される柱穴などが検出された。第二次調査では飛鳥時代前半の邸宅の一部が確認された。掘立柱建物六棟のうち一棟は総柱建物で後の郡倉クラスに匹敵する。さらに文献史料から平安時代末期にもここ宇治の地に貴族の居宅が存在したことを確認できる。それは平清盛の盟友であった藤原邦綱亭で、吉田経房の日記『吉記』から「宇治河亭」また「宇治新亭」と呼ばれていたことが知られる。その名から、宇治川にほど近い位置にあったと推定できる。

この邦綱の居宅には、還都が決まり福原から平安京にもどる際、安徳天皇の行幸があった。これらにより当地には少なくとも七・九・十二世紀に豪族・貴族クラスの邸宅が営まれていたことが確認できる。



図101 下山手北遺跡遺構平面図

祇園遺跡・神戸大学医学部附属病院構内遺跡（兵庫区楠町、兵庫区荒田町・上祇園町ほか）

祇園遺跡ならびに神戸大学医学部附属病院構内遺跡（現楠・荒田町遺跡、以下楠・荒田町遺跡として記述）は、兵庫区上祇園町から荒田町、中央区楠町の範囲にあり、近年福原に関連する遺跡として注目を浴びている。

祇園遺跡では、庭園遺構が検出され、この庭園遺構は、築造当初は、南に堤を築き、そのやや北に離れた位置に浮島を持つもので、その次の段階では、西側に石垣を築き、全体を大小の石で敷きつめた状態へと変化したし、浮島を埋没させた状態となっている。南側の落とし口付近では、多量の土師器が出土している。その次の段階では、南側の堤に洲浜を設け、全体は土で埋没し、浅い状態へと変化している。この遺跡から出土している瓦や土師器が京都産の可能性が高く、時期としては存続の時間幅が十二世紀後半に限定でき、玳^{たひ}玻^ぱ天目小碗が出土するなど、時期ならびに遺構の性格などから福原における平家関連の遺構と推定できる。

楠・荒田町遺跡では、東西方向三九メートルにわたって並行してはしるU字型とV字型の溝（二本）とその北側では櫓跡と推定できる特異な掘立柱建物跡が確認された。しかしながら、その後の詳細な検討によって、櫓とされた建物は後の時代のものであり、溝も同時並存ではなく時期をたがえてのものとの結論に至っている。ただ、溝から多量に出土した遺物から、溝自体は十二世紀後半を中心とした時期と特定される。二重ではないにしても、溝は、大規模なものであり、建物を囲むような防御的な様相を示すことから、武家の邸宅関連の施設ならびに邸宅を囲む壕または区画する施設としての色彩が強く、時期もあいまって平家関連の遺構の可能性が指摘されている。

このような祇園遺跡や楠・荒田町遺跡の調査成果から、この周辺が福原の中心地と考えられる。

兵庫津遺跡（兵庫区七宮町・本町ほか）

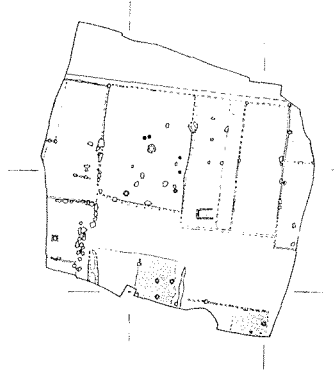
兵庫区中之島を中心として南北二キロメートル、東西一キロメートルに広がる、古代から近世にいたる遺跡である。兵庫津は『行基年譜』に大輪田船息おほのわたふねせとして初見するが、奈良く平安時代の遺構・遺物に関する情報は乏しい。九く十世紀の緑釉陶器片が御崎本町で、八世紀後半から十世紀代の須恵器、土師器、緑釉陶器と東西に走る二条の溝が芦原通で、平安前期の井戸が北逆瀬川町で、平安時代の遺物が本町で検出されているのみで遺物も少量に留まるが、芦原通での調査は小規模ながら大輪田泊関連の遺構として注目される。

十三く十四世紀にかけての遺構も七宮町などで検出されているが、土坑、ピットのみで町屋の具休相を把握するまでには至っていない。しかし、十五世紀後半く十六世紀になると七宮町や浜崎通で蔵建物の基礎と思われる石組み遺構などが見つかっており、断片的ながら町屋の配置を復元する手がかりとなっている。

数棟の町屋の配置を知ることができるようになるのは十七世紀前後からで、七宮町の二、三の調査地で幕末頃まで連続する遺構面が見つかっており、それらは基本的には元禄九年（二六九六）の「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」の街路などから推定される町屋の配置と一致している。また七宮町及びそれに隣接する本町での調査では炉壇が検出されており、茶室を持つ町屋があったことが推定できる。ただ、堺や京都などで見られる蔵と考えられる塙列建物せんれいぶつについては現在のところ確認されていない。江戸期の鍛冶遺構も鍛冶屋町二丁目で確認され、元禄以来の地名と遺構が一致したことは注意される。北逆瀬川町では中世末から近世初頭の護岸に伴う依積み遺構や、十七世紀半ば以降の鍛冶炉や墓地が発掘されている。近世の墓地はこのほか神明町、三川口町などで確認されているが、中世以前の墓については明確ではない。



第24次調査（七宮町）



第20次調査（七宮町）



第14次調査（七宮町）

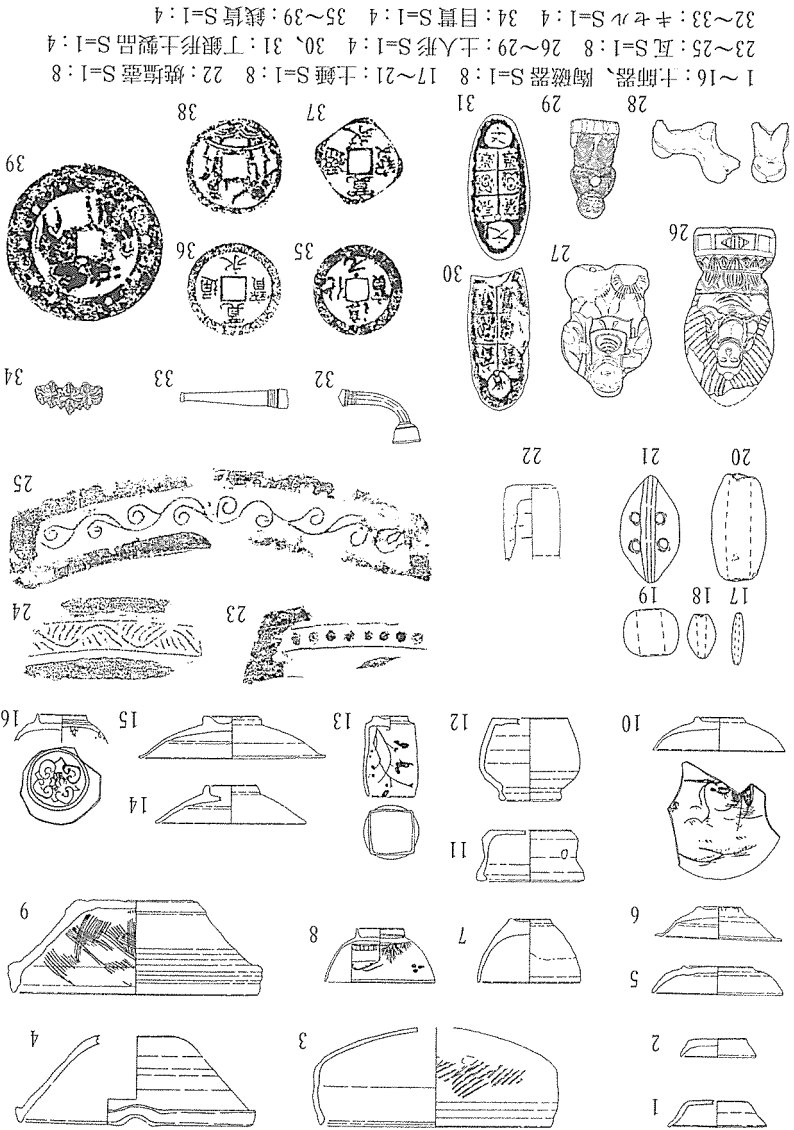


図102 兵庫津遺構平面図

町屋関係以外では、須佐野通での調査で、真光寺北東隅の濠が元禄の兵庫津絵図と合致する位置で検出されている。天正九年（一五八一）、池田恒興が花熊城の材を利用して築いたとされる兵庫城の遺構も、切戸町の調査で江戸期の陣屋、勤番所時代の北西隅付近の石垣が、中之島での調査では同期の東西方向の堀跡が見つかっている。この兵庫城築城と共に町の外周に都賀堤が巡らされるが、町中を貫通する西国街道の西の出入口である柳原惣門の遺構が西柳原町で調査されている。

遺物では国産陶磁器、輸入陶磁器、須恵器、土師器、土製品、石製品、石塔類、「従是東尼崎領」と刻まれる標柱、木製品、漆器、ガラス製品、瓦類、金属器、骨角製品のほか、動物の骨・歯、貝類、植物の種子、鉄滓、鞆羽口、炉壁、炭化材、土壁など多種多様なものが発掘されている。陶器には備前、丹波、常滑、瀬戸・美濃、京、信楽、明石、堺、唐津や萩などのみならず安南（ベトナム）の「焼締長胴壺」、磁器も肥前のほか、中国製の青・白磁、青花、朝鮮半島製の白磁皿など多岐に渡っている。土製品には土錘や焼塩壺など生活用品のほか、神仏を含む土人形、犬・猿・馬などの動物形・灯籠・太鼓橋・鳥居・城・家屋などの器物形、泥面子・芥子面や丁銀形土製品など遊戯・信仰関係のものもある。瓦も門口町、御崎本町、西柳原町、七宮町、西宮内町や西仲町などで中世の軒丸瓦、軒平瓦や鬼瓦が出土し、その中には播磨を中心に分布するいわゆる「波状文軒平瓦」の初期のものや、花熊城と同文の軒平瓦も含まれる。銭貨では宋・明銭を中心とする渡来銭、無文銭、慶長通宝、寛永通宝、宝永通宝、文久永宝、絵銭のほか寛永銭に真鍮を張り合わせた性格不明の銭貨や、天保通宝の鑄放し銭なども出土している。動物の骨・歯、貝類には、イノシシ、イヌ、ニホンジカ、サメ類、フグ、マダイ、アカガイ、アサリ、アワビ、サザエ、ハマグリ、マガキ、バイなどがある。

図103 兵庫津遺跡出土遺物



上沢遺跡（兵庫区上沢通・松本通、長田区五番町・六番町・七番町）

平成元年（一九八九）に都市計画道路房王寺線築造に伴う調査で存在が確認された遺跡で、その後の山手幹線拡幅による調査によって上沢遺跡の性格が明らかになりつつある。当遺跡は縄文から鎌倉の各時代の遺構や遺物が多数発見され、各時代の集落の中心を移しながら営まれた複合大遺跡である。

近接地には奈良・平安時代の屋瓦が出土した室内遺跡が存在し、「房王寺」「堂ノ前」「塔ノ本」「室内ノ」などの字名が残っていることから、上沢遺跡周辺には寺院跡、あるいは雄伴郡衙を想定する考えもある。近年の調査でも、奈良・平安時代の掘立柱建物などの遺構や遺物が多く発見され、当該期の地域史を考える上で重要性が増している。

古代の主な遺構は、八〜九世紀頃の掘立柱建物が十数棟、半截した丸太材の内面を削り抜いた板材を三枚合わせて井戸枠とした井戸や、井籠組の井戸などが確認されている。特筆すべき出土遺物では、銅製帯金具が二点、井籠組井戸枠の井戸から銅鏡が出土している。この銅鏡は法隆寺や正倉院の伝世品に類例があるもので、貴重な発見である。また、遺構には伴わないが、重圈文軒丸瓦じゅうけんまわの瓦当が一点出土し、軒平瓦片も多く出土している。こうした遺物も、周辺に当時の寺院または官衙が存在したことの傍証となりうるものである。

中世になってからも、上沢遺跡では多くの掘立柱建物や井戸が引き続き確認されている。

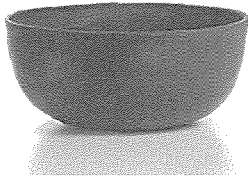


写真237 銅鏡

御蔵遺跡（長田区御蔵通・菅原通）

御蔵遺跡は苅藻川左岸微高地上に位置する。これまでの調査成果から、河川の微高地上に、南北方向に細長く遺構が分布していることが明らかになっている。掘立柱建物の配置は、側柱建物群と倉庫と想定される総柱建物群から構成されていることが判る。現在のところ、規模の大きな建物や礎石建の建物は発見されていない。建物の時期は概ね奈良時代後半～平安時代前半（八世紀後半～九世紀）と考えられる。

また、建物群の西側は低湿地となっており、幅約四〇～五〇メートルの遺構空白域が存在する。その西側にある別の微高地上では、飛鳥時代末～奈良時代初頭の掘立柱建物が発見されているが、この周辺の調査例が少ないため、詳細は判らない。

御蔵遺跡の性格は、出土遺物からも類推することができる。

（一）役人の居住・滞在を窺わせる五点の帯金具が出土していること。これらの帯金具は郡領層や任用国司クラスの地方官、または地方に居住する有位者が帯びていた可能性が高い。

（二）鍛冶・鋳銅関係の遺物の出土。当遺跡には一般集落にあまりみられない小鍛冶・鋳銅の作業場・工房が設けられていたことが推測される。

（三）「大殿」と墨書された曲物桶の出土。前記の建物群の間で発見された井戸（九世紀代）からは、「大殿」と墨書された曲物桶が出土した。「大殿」とは宅の中心的な建築物、建物群の中心に存在した殿舎と考えられ、豪族（郡領クラス）の公私にわたる日常的な生活空間あるいは建物が存在した可能性が指摘される。

(四) 複数の硯、転用硯の出土。御蔵遺跡ではこれまでの調査で硯、転用硯が複数出土している。これは、この遺跡に生活する人々が日常的に筆記することが必要であったことを示し、文書・木簡などの作成が行われたことを示唆する。

(五) 鉄製鈎・鍵の出土。これらは穀物・物品を収納する倉庫の鍵と考えられ、倉庫遺構と考えられる総柱の建物群を確認していることから、倉庫群で多量の物資を収納・保管する機能を有していたと考えられる。

(六) 越州窯系青磁、三彩陶器、銅鏡、土馬の出土。これらの遺物は、一般の集落遺跡よりもむしろ官衙・寺院遺跡で出土する傾向にある。限定された階層、施設で使用される物品である。

以上、掘立柱建物群と出土遺物の点から、御蔵遺跡は官衙遺跡（郡衙遺跡）、または地方豪族の居宅の可能性が高いと考えられる。

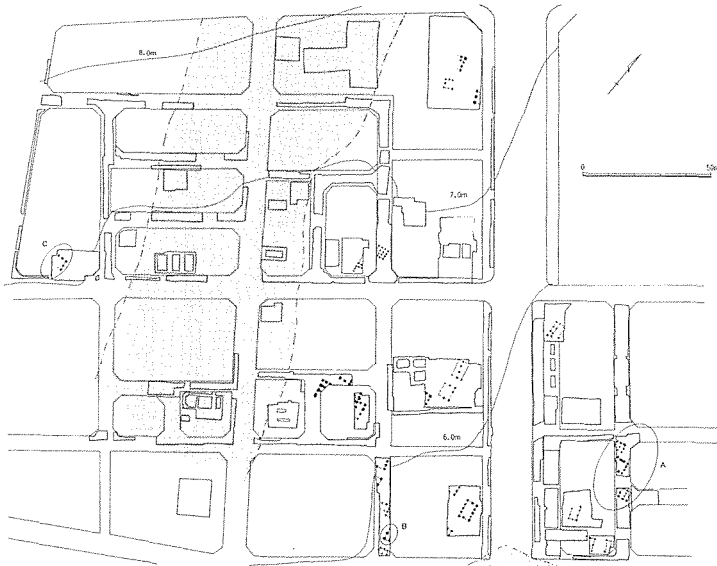


図104 御蔵遺跡主要遺構集成図

神楽遺跡（長田区神楽町）

神楽遺跡は、旧苅藻川（新湊川）の下流右岸に位置し、苅藻川、妙法寺川によって形成された扇状地上の標高約四メートルの微高地に立地している。

この遺跡は、昭和五十四年（一九七九）に市営地下鉄の建設工事に先立って行われた確認調査で発見された。その後、保育所改築工事や小学校改築工事などに伴い、これまでに九次の発掘調査が行われ、弥生時代後期から平安時代中期にいたる遺跡の実態が明らかになりつつある。

平安時代の遺構は、これまでの発掘調査で溝一条と掘立柱建物の柱跡三個が検出されているに過ぎない。

しかしながら、この幅四メートル以上、深さ八〇センチメートルの溝からは、須恵器・土師器・黒色土器のほか、緑釉陶器・灰釉陶器などの施釉陶器や、「東福」と墨書された土器が七点出土するなど多彩な遺物が見られる。この溝の埋没時期は出土遺物から十世紀中葉を前後する時期にもとめられる。

この遺跡を特徴づけるのは、須恵器・土師器などのほか、日常の食器類としての使用は考え難い東海・近江・京都からの搬入品である施釉陶器が見られる点や、墨書された土器が出土したことである。神楽遺跡について文献資料から直接得られるものはないが、八部郡衙との関連も想定される。なお、「東福」の意味については未解明である。

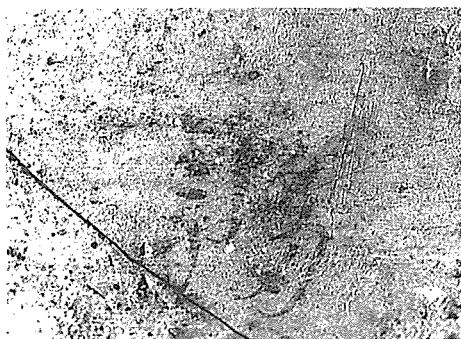


写真238 「東福」の墨書のある土器

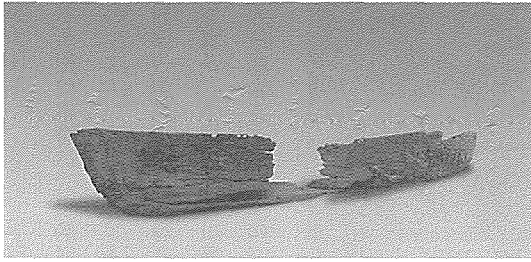


写真239 三材構造船

二葉町遺跡（長田区腕塚町・久保町・二葉町）

二葉町遺跡は、標高約二丁四メートルの比高差がない平坦な地形に立地している。また、現在の海岸線から約五〇〇メートルに位置しており、海と密接に関連した集落遺跡である。

この遺跡周辺は、南北に大正筋商店街、南端の東西に六間道商店街などの大小の商店街が網目状に広がる商業地区であり、神戸市の市街地形成期から木造家屋が密集する地域である。阪神・淡路大震災により甚大な被害を被ったのち、市街地再開発事業に伴う発掘調査が開始され、縄文時代晩期から鎌倉時代にいたる遺跡の実態が明らかとなった。この遺跡が最も栄えた時代である平安時代末期から鎌倉時代にかけての集落が注目される。これは、平家の台頭に伴う大輪田泊修築や日宋貿易、福原遷都や源平合戦の舞台になった歴史の激動期に連綿と営まれた集落である。

この遺跡を特徴づけるのは、井戸の数が多く、大型の木杵を据えた溜井、同じ場所に集中して検出される建物跡などであり、海岸部における集落のあり方が判る遺跡である。出土遺物としては日常什器のほか、土錘や蛸壺といった漁撈具関連のものや、輸入磁器も出土しているが、注目されるものとして井戸杵に転用された船が出土している。この船は、船首、胴部、船尾の三材材から構成される三材構造船の胴部であり、絵巻物に描かれた船舶から船体構造の検証を強いられてきた船舶研究にとって貴重な発見となった。

大田町遺跡（須磨区大田町・戎町）

大田町遺跡は、須磨区大田町六丁目周辺に所在する、弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。妙法寺川左岸標高一二メートル前後の沖積地に立地する。現在にいたるまでに十数回の調査がおこなわれている。調査で注目されるのは、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物などの遺構と遺物である。調査成果から古代山陽道に面した駅家の可能性が指摘されている。十数回の調査の主な成果を以下に述べる。

一次調査では円面硯、二次調査では緑釉陶器・灰釉陶器・砥石・刀子・鉾滓・馬の歯や骨等、また寛平大宝・延喜通宝等が出土している。三次調査では、「荒田郡中富里荒田直」とへら書された円面硯が出土している。五次調査の須恵器甕埋納遺構の内からは、種子類と銭貨七枚が検出された。その内訳は和同開珎

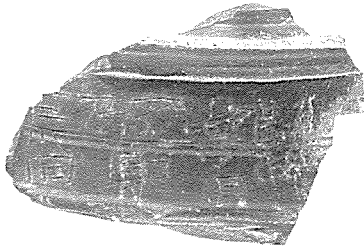


写真240 第3次調査出土「荒田郡」銘硯

二・萬年通宝三・神功通宝一・不明一である。長寿を願った埋納で、当時の人々の精神生活を知る上で貴重な資料である。調査全体で瓦の出土量はわずかで、瓦葺き建物の存在はなかったようである。

一〇五次調査地は、主要地方道明石神戸線に面し、この道路が古代山陽道と推定されている。調査地南辺に東西方向の溝が検出され、山陽道北側の側溝と考えられる。山陽道のルートは、当遺跡から西へ海岸線沿いのルートを取る方法と他に多井畑―塩屋ルート、白川峠―伊川谷ルートが考えられているが、海岸線ルート以外のルートは当遺跡を通過するか逆戻りすることとなり、遺跡の位置と性格の解明が重要な意義をもっている。

2 明石川流域とその周辺地域の遺跡

この地域は、六甲山系の西側に連なる標高一五〇メートル前後の丘陵地を水源とし、南流する数本の河川が流域に形成している平地、河岸段丘などを中心に遺跡が分布する地域であり、現在の垂水区・西区が含まれる。旧播磨国明石郡に属し、その郡衙は、西区森友二丁目周辺に広がる吉田南遺跡にあったと思われる。

律令期山陽道は、須磨から海岸線沿いのルートまたは、多井畑から塩屋ルート・白川峠から伊川谷ルートのおいずれかのルートを経て明石に入る。明石駅家は、前出の吉田南遺跡、明石市太寺町付近、同市明石武家屋敷下層遺跡などがその推定地とされる。

また、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて、西区神出町の神出古窯址群では、全国的に須恵器生産が衰退傾向にあったにも関わらず、盛んに生産がおこなわれていた。西日本の各地でその製品が出土しており、当時の流通を考える上で、貴重な存在となっている。

近年発見された注目される資料としては、十六世紀に築城されたと考えられる端谷城跡の埴列建物内から出土した甲冑がある。

垂水日向遺跡（垂水区日向一・二丁目・陸ノ町・神田町・天ノ下町）

垂水日向遺跡は垂水区日向・陸ノ町・神田町・天ノ下町に所在し、そのうち日向地区は海岸線にほど近い、

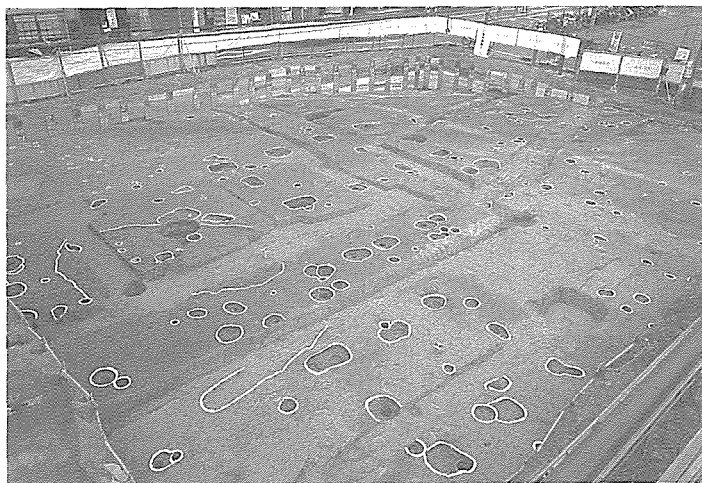


写真241 垂水日向遺跡掘立柱建物群

砂堆とその背後に広がるラグーン（潟湖）に堆積した沖積地に立地する。遺跡が存在する時期は縄文時代から中世にかけてであるが、飛鳥時代以降は多くの掘立柱建物跡が見つかっている。特に平安時代から鎌倉時代にかけては、掘立柱建物群や井戸などが見つかっており、当時の集落景観の一部を復元することができる。その掘立柱建物跡群の付近からは在地の蛸壺・漁網に吊した土錘・製塩土器などが多く出土しており、漁業・製塩業を主に営んだ集落と考えられる。

平安時代、この辺りは東大寺の荘園垂水荘であった。残されている文書中には「塩山」の記載がみられることから、この垂水荘は製塩に関する荘園であったことが判る。先述したように、垂水日向遺跡では製塩土器も出土しており、垂水荘との関連を窺わせる。

二ツ屋遺跡（西区玉津町二ツ屋）

二ツ屋遺跡は、明石川に合流する櫛谷川（はばた）の西岸の沖積地に立地している。遺跡の成立は弥生時代の終末にさかのぼり、古墳時代や奈良時代の遺構も確認されているが、主体は平安時代末～鎌倉時代初頭の邸宅跡であった。

この邸宅跡は、一辺一〇〇メートル程度に復元可能な方形の区画溝に囲まれていたようで、調査区の北と南に区画溝の一部が確認されている。建物は建て替えを含めて七棟確認され、コの字状に配置されていたと推定されている。中心になる建物は四間×六間の建物で、建て替え後も同様の規模を有していた。

この中心建物には地鎮のための土坑が二基確認され、屋敷地内には子供のものと同推定される木棺墓も一基検出されている。当時の習俗を知ることのできる好例といえる。建物周囲には溝が巡り、北側には柵列もあることから、他の建物とは異なることが強調されている。この中心建物の前面には、規模の小さい池も配置され、その南側には庭と考えられる遺構の空白地が広がっている。寝殿造を意識したような配置とみるむきもある。

建物群の中で注目されたのは、この池の西側にあった三間四方に復元できる建物跡であった。この建物は、本来は一間四面庇の礎石建物で、軒瓦

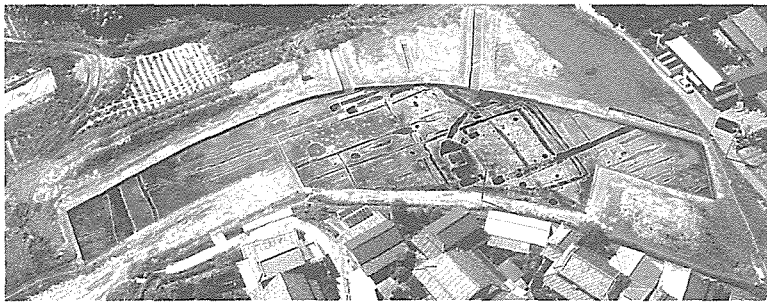


写真242 発掘調査で見つかった邸宅跡

片を含む瓦類が出土していることから、屋根の一部に瓦を葺いていたようである。この建物の性格については、池の西側にあたり、東側に入り口が推定できることなどを考慮して、阿弥陀堂のような持仏堂であった可能性が高いと考えられている。

古代末から中世に移行する時期（十二世紀後半）の邸宅跡は、地方の有力者層の実態を解明するにあたり大きな影響を与えるものといえる。しかし、この邸宅が営まれる以前にも廃絶後にも、これに連続するような遺構は少なく、突然邸宅が出現し廃絶している。明石川流域を含めた東播磨という地域社会の中で、平安時代末の複雑な政治状況をも考慮しながら見ていかなければならないであろう。

日輪寺遺跡（西区玉津町二ツ屋）

日輪寺遺跡は櫛谷川右岸に広がる西神丘陵の先端に立地している。これまでの調査では、弥生時代後期の集落跡、平安時代～室町時代の屋敷地跡、中世末期の寺院に伴うと考えられる遺構などが確認されている。

第一次調査で検出された平安時代中期（十一世紀代）の方形土坑は、一辺約七五センチメートル、残存する部分の深さは約四〇センチメートルを測り、ほぼ垂直に掘りこまれている。坑底は平らで拳大の円礫が敷き詰められており、その上に須恵器の壺を中心に据え、鉄鋌（長さ三四・八センチメートル、幅九・七センチメートル、重量一七四グラム）と鉄製U字形鋤先（長さ二八・三センチメートル、幅二・四センチメートル）各一点が配置されていた。鋤先には、表面に直径約一八ミリメートルの銅銭が一点銹着（しゅうちやく）している。銭文は腐食のため判然としないが、法量からは承和昌宝（初鑄承和二年（八三五））以降の皇朝銭であると考えられる。また下面にはイネ粃が多数銹着しており、粃を撒いた後に器物を供献した状況がみてとれ、地鎮に伴う祭祀土坑と考えられる。

また、三間×五間の掘立柱建物跡をはじめとする建物群や、土師器・須恵器・鉄製農工具類を副葬した木棺墓なども検出され、平安時代から中世にかけてこの地に連綿と生活が営まれていたことが明らかとなっている。これは二ツ屋遺跡で検出した邸宅の盛衰を視野に入れ、関連を検討する必要があるだろう。

天台宗普光山日輪寺は、奈良時代に行基によって開山されて以後、戦国期に城郭となり、十六世紀中頃に阿波三好氏の焼き討ちによって滅したとされ、本尊を安置する持仏堂が現在に受け継がれていると伝えられている。古代の日輪寺に関わる遺構は未発見であるが、寺域の東↘北東を画する築地状遺構（十五世紀↘十六世紀に廃絶／第三次調査）、さらにその外側を南北に走る壕状遺構（十一世紀末↘十五世紀末／第七次調査）など、中世日輪寺を推定できる遺構の発見が相次いでいる。これらは中世動乱期における東播地域の動静を明らかにするものとして、さらなる調査成果が期待されるところである。

頭高山遺跡（西区伊川谷町小寺・同前開）

頭高山遺跡は、西区を流れる伊川左岸の比高差六〇メートルほどの丘陵上に位置する。昭和五十三年（一九七八）以降の西神ニュータウン開発に伴い発見された遺跡で、弥生時代中期の高地性集落であることが知られていた。

さらに、平成五年（一九九三）度を実施された大規模な試掘調査によって、中世の山岳寺院跡の存在するところが確認された。その後、平成七年から三年次にわたる調査によって、この寺院跡の全容が明らかにされた。寺院跡は、頭高山の頂上から南西方向に馬蹄形に伸びる二本の尾根と、その間の谷を利用して築かれている。また中心伽藍は、山頂付近より中腹までの斜面を切り崩して谷を埋めた平坦面に置かれ、両側の尾根上および斜面に諸施設を配置して谷筋を参道としていたようである。

本堂は、中央の平坦面上で検出された二基の基壇のうち、向かって右側のやや大きい基壇上に建てられていたようで、礎石などから、間口五間、奥行五間の規模で前面と両側面に縁を巡らせる構造であったと考えられる。また礎石には、火を受けた跡が残っており、焼土面も認められることから、焼失したことが判明した。ほかに四つの基壇と斜面を削り込んで整地したと思われる平坦面の区画が数カ所みられ、うち南斜面の平坦面では、二間×五間以上の礎石建物で、庫裏と考えられる施設が確認されたが、ほかは、明確な建物は、検出されなかった。また南側の尾根の付根付近にある五輪塔は、かつては瓦葺きの覆屋が存在したようで、ほぼ現位置を保っており、下から埋葬施設と考えられる備前の大甕が出土した。

この寺院は、出土遺物などから室町時代後期には存在していたと考えられる。やや時期は遡るが、「太山寺文書」には、貞永二年（一二三三）に伊川荘に寺領をもつなど一帯に勢力をもっていた中世寺院として「大谷寺」の名がみられる（『県史』一「太山寺文書」〔京都大学〕一三〇）。現在、伊川谷町小寺の集落には「頭高山太谷寺」という寺院が存在し、かつて寺は頭高山中にあつたという伝承があることなどから、この寺院に比定できる可能性が高い。



写真243 頭高山遺跡本堂跡周辺

第三節 遺 跡

白水遺跡（西区伊川谷町潤和・白水）

白水遺跡は西区伊川谷町潤和^{じゅんわ}に位置する弥生時代後期末～鎌倉時代の集落遺跡で、特定土地区画整理事業に伴って発掘調査を実施した。調査の結果、丘陵裾部に当たる第四次調査地では、平安時代中期の梵鐘製造遺構が確認された。現地の字名は「延命寺」とされ、近接地に寺院の存在が想定できる場所である。隣接する小さな谷地形に当たる部分からは平安時代中期末の須恵器・土師器とともに瓦当を含む瓦も多数出土している。

梵鐘製造遺構は、直径一・五メートル、深さ五〇センチメートルの円形土坑の底部に据えられた直径五〇センチメートルの白色粘土のドーナツ形の定盤（梵鐘の鑄型を据える台）が良好に遺存しており、鑄型が据えられた上面の被熱が顕著である。「出吹き」による梵鐘鑄造が終了した後は、土坑内に梵鐘の鑄型外型片と溶解炉壁片が大量に破棄されている。出土した鑄型外型から復元すると、直径四六センチメートル、高さ約八〇センチメートルで、池の間に銘文が陽刻された梵鐘が推定できる。

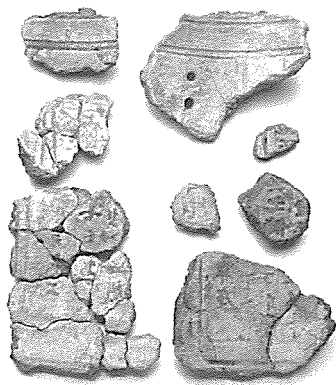


写真245 梵鐘鑄型



写真244 梵鐘の鑄型外型

寒鳳遺跡（西區伊川谷町潤和）

寒鳳遺跡は、明石川と支流である伊川との合流点の北東、伊川により形成された段丘上及び南側斜面地に立地する。平成七年（一九九五）度の共同住宅建設に伴う事前調査により発見された遺跡である。その後、数次の発掘調査が実施され、古墳時代後期及び平安時代後期の遺構・遺物が確認されている。

平安時代の遺構は掘立柱建物、土器溜まり、鍛冶炉、溝などで、広く眺望の良い台地上ではなく、段状に成形された南側斜面地にのみ構築されている。建物は数棟が復元されているが、段状地に立地することから、いずれも規模は大きいものではない。出土遺物は多量の須恵器・土師器の碗・皿類を中心として青磁・白磁、施釉陶器、瓦が出土している。

また、特筆される遺物として石帯・陶硯・青磁合子蓋のほかには、ヘラ描き蓮華文軒平瓦が出土しており、同様の瓦は当遺跡東一キロメートルに位置する明石郡衙の候補地でもある大寺廃寺や、北西二キロメートルに位置する白水遺跡でも類例が確認されている。

平安時代の遺跡は、特異な遺物が出土することにより、通常の集落遺跡とは考えにくく、郡衙などに比定される周辺の同時期の遺跡との関連性が注目される。また、南の谷筋を意識して立地することは、この谷筋が重要な通路として機能したものと推測され、主要な遺跡間を結ぶ要路上に位置した可能性が高く、律令期山陽道を考える上で重要な遺跡として捉えられる。

吉田南遺跡（西区森友）

吉田南遺跡は、明石川下流右岸の標高約七メートルの沖積地に位置する。東は明石川、西は王塚古墳の立地する丘陵の間にあり、海岸線からの距離は約二キロメートルである。

これまでに知られている、この遺跡の集落としての存続期間は、弥生時代後期から室町時代に至り、幾度かの縮小や隔絶があるものの、継続性の点においても、明石川流域で最も重要な遺跡の一つである。

昭和五十一年（一九七六）から行われた発掘調査によって、すでに数万平方メートルが調査されているが、遺跡の範囲については不確定な部分が多い。主な遺構として、掘立柱建物約八〇棟、竪穴住居約一二〇棟、柵列四条、井戸六基、大溝、旧河川などが確認されている。

奈良時代以降の姿を概観すると、遅くとも奈良時代の中頃には、二群の整然とした配置の掘立柱建物群が成立し、平安時代まで継続している。平安時代の後半頃にこれらの建物群は廃絶するが、鎌倉時代から室町時代にかけて規模を縮小して再び集落が形成され、近世以降は水田化している。

奈良時代から平安時代の掘立柱建物は、南流する大溝をはさんで、東西の微高地上に建てられている。建

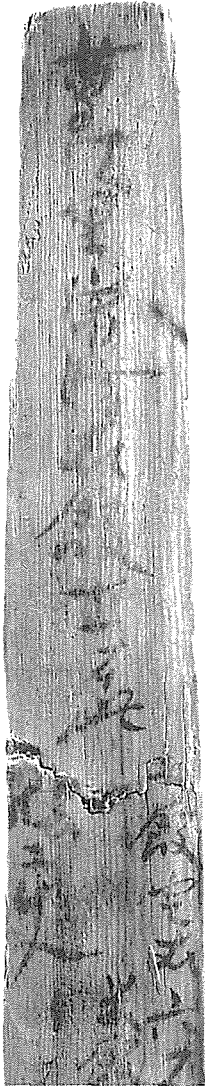


写真246 「葛江里」
木簡

物は真北を軸に整然と配置されている。建物の柱は、スギやヒノキを中心とした針葉樹が用いられ、直径が三〇センチメートルを超えるものもある。柱の下には、同じく針葉樹の厚さ一〇センチメートル以上の礎板が置かれている建物もある。複数の礎板が接合することから、現地で割材し、加工していたことが窺える。

特筆すべき遺物として、木簡、陶硯、墨書土器、木製車輪、銅製帯金具、銅鏡、銅製獣足などが出土している。また、東部掘立柱建物群の北側には、旧河川に架かっていた橋梁遺構が発見されている。

橋梁遺構は、幅約一・四メートル、長さ一三メートル以上の規模で、河床からは最大二メートル以上の高さがあったものと推定されている。支柱は直径三〇センチメートル、他の柱は直径二〇センチメートル程度の丸太杭により、構成されている。

木簡は九点出土している。米飯（干飯）の支給もしくは貯蔵に関する記録の木簡には、「葛江里」とあり、播磨国明石郡葛江郷（かじえ）に比定される地名が記されている。この地名は、現在の明石市藤江と推定されている。米の支給、または請求に関する記録の木簡には、「鴨郡」とあり、これも播磨国鴨郡を示すと考えられる。この地名は、現在の小野市及び加東郡の一部と推定されている。このほかに、出挙（すげ）に関わる可能性のある木簡、帳簿様の木簡、荷札の形態をした木簡、習書の木簡などがある。習書の中には「播磨国司移撰津職」などの文字があり、官人によって書かれていたことを窺わせている。いずれの内容も、当時の地方行政施設が存在していたことを示唆している。文字資料としては、墨書土器も多数出土している。判読できたものとしては、「主」「葛」「欠」「東」「上東」「仁」「池島」「五房」「大屋」などがある。このうち、「葛」は、木簡と同様に葛江郷に関する可能性がある。

第三節 遺 跡

玉津田中遺跡（西区玉津町田中・宮下）

玉津田中遺跡は、明石川中流域左岸の沖積地及び段丘上に立地する、弥生時代から古墳時代、及び平安時代後期から鎌倉時代の拠点的な集落跡である。当遺跡における中世の遺構は十一世紀中葉から認められるが、発達した集落の姿がみられるのは、徳政地区を中心に掘立柱建物の集落が営まれる十一世紀後葉以降である。十二世紀後葉になると、集落の中心は北側の二ノ郷地区や東側の辻ケ内地区へと移動する。辻ケ内地区では、居館跡が検出されている。居館は、存続期間は短かったものと推定されるが、幅五メートル、深さ一・四メートルの堀で囲まれた約七千平方メートルの敷地内において、池、建物跡、井戸、土坑、鍛冶炉などが検出された。池は面積が二千平方メートルを超えるとみられる広大なもので、多量の土器、瓦、木製品などが出土している。建物跡のうちの一棟は、柱穴や礎石は確認されなかったものの、隣接する池の中より鬼瓦や軒瓦を含む大量の瓦が出土していることなどから、瓦葺建物と考えられている。

そのほか当該期の遺構は、平野地区の調査においても掘立柱建物跡などが検出されている。建物に隣接する溝から硯や黒漆の付着した須恵器、鉞滓こつさいなどが出土しており、しょうかん荘官クラスの建物や工房の存在も想定されている。

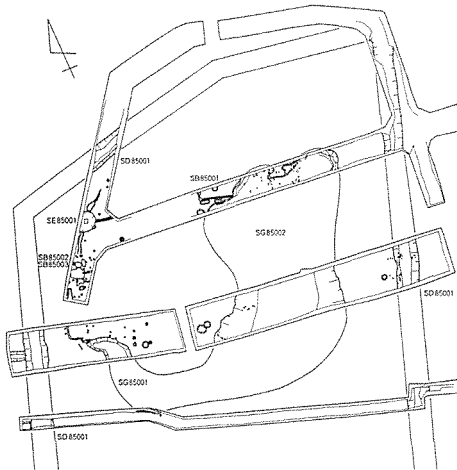


図105 玉津田中遺跡辻ケ内地区居館全体図

端谷城跡（西区榎谷町）

端谷城は明石川の一支流、榎谷川によって形成された東西に広がる榎谷の最奥部にあり、北から南に伸びる丘陵の背後を大規模な堀切によって切り離れた先端部に築城された山城である。十六世紀の後半、三木の別所氏に与し、命運を共にした衣笠範景の居城と考えられている。現在「本丸」「二の丸」や「西の壇」などの曲輪が良好な状態で残されている。

平成十三年（二〇〇二）度以降、将来の史跡整備に向けて、城の構造を把握する目的で発掘調査を実施した。平成十三～十六年度の調査では、「二の丸」「西の壇」に礎石建物、掘立柱建物があることが確認されている。平成十七年度の第五次調査では、「本丸」北西隅の「物見台」に近接する博列建物から甲冑が多量に出土した。

博列建物は土蔵状の建物で一辺約二九センチメートル、厚さ約二センチメートルの方形博を地中に埋め、建物の外壁とするものである。東西約六・二メートル、南北約九・二メートルを測る。建物内部の床面は北・西・南側がコの字状に約二〇センチメートル高くなっており、その箇所には拳大の小石が敷き詰められている。甲はこの石敷面の北半部から集中的に検出された。

甲は押付板、脇板などの形状から、当時「胴丸（現在は腹巻）」と呼ばれた背中で引き合わして着用するものと思われる。数量的には、胴丸の背面に一領に付き二枚ある「押付板」が二五枚出土したことから、計一三領分と推定される。ただ現在、小札の下になり確定できないものもあり、増加することも考えられる。出土した部品の大半は胴部（前後の立挙や長側）や草摺などを構成する鉄・革札であるが、胸板、脇板のほか、

八双金具、責^{せめこほせ}鞋、笠^{かさこほせ}鞋なども見つかった。ただ兜鉢、鍬形や袖と思われるもの、大鎧や腹巻に伴う部品そして武器類などは見られない。

鉄札は現在一四〇〇枚以上確認しており、碁石頭^{ていしがしら}伊予札^{いよまね}（二山、三山）及び本小札（並札、盛上、三目）などの種類がある。鍛^{たう}に使われる札もあるが上下を交互に入れ替えた状態で検出しており、鍛の札としては使用していないものと考えられる。このことは出土した甲に様々な札を再利用した「仕返し」系のものが含まれることを示している。

城跡の中心施設と考えられる「物見台」のトレンチから出土した瓦と、この博列建物に伴うそれとは同文で、かつ西区性海寺鐘楼付近採集瓦及び加古川市鶴林寺護摩堂・常行堂使用瓦とも共通している。鶴林寺の瓦は棟札や瓦刻銘などから永禄六年（一五六三）、同九年とほぼ断定でき、これより端谷城も一五六〇年代に築城されたものと考えられる。

また「物見台」・博列建物出土瓦には「恵比寿」文や「宝袋」文の鬼板も含まれている。中世に遡る恵比寿像は、木像や墓^{かぶたまた}股などの建築部材を含めて希少なもので、福神信仰の具体相を知る上でも注意される。

なお、「西の壇」から出土した瓦の中に、西区如意寺と関係の深い十五世紀代と考えられる軒平瓦や鬼瓦が含まれることは、寺院など、山城築城以前の瓦葺建物の存在を推測させる。

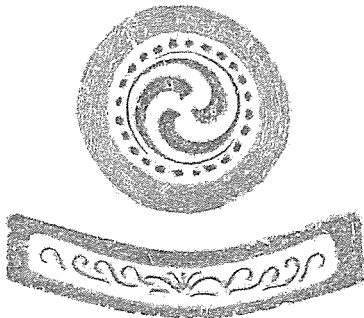


図106 端谷城出土軒瓦



図107 埤列建物平面図



図108 甲（よろい）出土状態図 S=1:10（右が北）



写真247 神出古窯址群釜ノ口支群3号窯

神出古窯址群（西区神出町）

神出古窯址群は雌岡山めおとの西側に広がる印南台地の北東端に位置する神出町一帯に分布する平安時代後期～鎌倉時代前期の窯址群である。窯址は、雌岡山裾の斜面や台地上を流れる小河川によって形成された浸食谷などの傾斜地などに数基から十数基が群を成して分布する。

発掘調査では数十基の窯址が発見されているが、本来は百基以上が存在していたと推定される。

窯址で出土する遺物は、灰原に捨てられた須恵器や瓦などの未製品と、須恵器を焼く際に使用された窯道具などである。須恵器には大型の甗、壺、碗や捏鉢こぼち（摺鉢）などがある。

集落は、台地上にあって、掘立柱建物などが発見されている。

特に一般の集落との違いは見当たらない。

この他、集落に近い台地上で製品を作る粘土を採掘した跡が発見されている。採掘した粘土は、地表を覆う黄褐色の粘土ではなく、その下にある灰白色の精良な粘土を採取している。

なお、集落の出土遺物の中に瓦・須恵器の不良品などが発見され、出荷に先立つ選別が行われたものと推定される。

窯址から出土する遺物は、甗・壺・碗や捏鉢などがあり、平安時代後期（十一世紀中頃）から鎌倉時代前期（十三世紀前半）まで

の約二百年間の時期幅があり、時代によって主要な生産品に変化がある。

当窯址群で生産された遺物の多くは、西日本を中心に全国各地の遺跡より出土する。特に捏鉢は当窯址群の特産品という存在で、西日本の当該期の遺跡からは必ず出土し、当時の一大窯業地帯であったと言える。瓦は播磨地域各地の寺院や官衙かんがなどでも発見されるが、その主要な消費地は平安京やその周辺の寺院である。これまでの調査で、神出産の瓦が出土しているのは、鳥羽離宮・東寺・六勝寺ろくしょうのうちの尊勝寺などである。

従来の窯址の調査では、窯址だけが発見され、集落などの状況が不明であった。当窯址群では集落や採掘坑などが発見され、生産の過程を知る上で重要な資料を提供するものと言える。

また、生産品の中に瓦があり、使用された寺院の建立年代からその時代が特定できる。このことは土器の編年を考える上で重要な視点となる。



写真248 神出古窯址群出土遺物

3 六甲山地北部地域の遺跡

六甲山地の北側のこの地域は現在の北区であり、六甲山地北側斜面、帝釈山地などの山地がその主な面積を占め、また帝釈山地の北東には三田盆地にかけて丘陵が続いている。一方、河川の流域を中心とした平地や河岸段丘も存在し、遺跡は主にこうした地形に多く分布する。

この地域は旧摂津国有馬郡、同八部郡、播磨国美囊郡それぞれの一部を含む。中でも現在の八多町、長尾町には、古代の官衙に関連する遺跡と推定される下小名田遺跡、宅原遺跡が存在する。中世には各河川流域に集落が点在し、地方豪族の荘園が存在したと考えられている。

また、『日本書紀』にもその記述の見られる有馬温泉には、安土・桃山時代に豊臣秀吉によって造営された湯殿跡と推定される湯山遺跡が発見され、注目を集めている。

六甲山地では古くから淡河町の石峯寺経塚や八多町の大松山経塚をはじめいくつかの経塚が知られている。さらに近年発見された勝雄経塚や再確認された有馬温泉寺伝来の銅製経箱など興味深い資料が蓄積されている。

宅原遺跡（北区長尾町宅原）

宅原遺跡は北区長尾町宅原に所在し、武庫川の支流である長尾川によって形成された谷間の沖積地と、南側の右岸から長尾川に向かって伸びる、数本の丘陵先端の段丘上に立地する。その範囲は、東西約二キロメートル、南北約一キロメートルの範囲に広がる。

飛鳥時代の遺構としては、掘立柱建物や大溝が

見つかっている。岡下地区の大溝からは「評」の文字が書かれた墨書土器や円面硯が、宮ノ元地区の大溝からは日本最古の木彫面や人形など様々な木製品と、馬骨などの祭祀に関連する遺物が出土している。

奈良時代から平安時代初めにかけての遺構としては、宮ノ元、豊浦地区を中心に掘立柱建物や溝が、また宮ノ元地区では、谷筋をせき止めた堤と、溜め池が見つかっている。この溜め池は、奈良時代に築かれ鎌倉時代まで改修しながら使用されていた。豊浦地区の溝内や、宮ノ元地区の溜め池付近からは、「五十戸□」「郷長」「山代」「田木」「池邊」などの文字の書かれた墨書土器や、人面墨書土器が出土している。

これらの飛鳥・奈良時代の出土遺物から、律令制下地方官衙がこの地域に置かれていたと考えられる。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては宅原遺跡内の各地区に散在的に掘立柱建物がつくられる。それらの建物の付近からは、木棺墓や井戸などが多く見つかっている。岡下地区、豊浦地区で見つかった木棺墓から



写真249 宅原遺跡出土の木彫面

書土器とともに、呪符木簡・下駄・砧・箸などの木製品や鹿角、種子などが多数出土している。

室町時代の掘立柱建物や井戸は豊浦地区で見つかっており、中世末期の石敷の園池や近世の民家に繋がる掘立柱建物が宮ノ元、豊浦地区で見つかっている。

中世この地域は、三鈴寺領の宅原荘として領有されていた。先述した遺構や遺物はその頃のものであり、荘園内での生活や、散村的な荘園の景観が復元される。

宅原遺跡は、一つの限られた地域のなかで古代から現代にいたるまで連続と集落が営まれている。このことから、農村集落の古代から現代までの変遷を知るうえで貴重なモデルとなる。また宮ノ元地区、豊浦地区付近は全国的に見ても調査例の少ない律令制初期地方官衙と、それに続く地方官衙である可能性が高く、律令制下における地方官衙の変遷を知る上でも重要である。

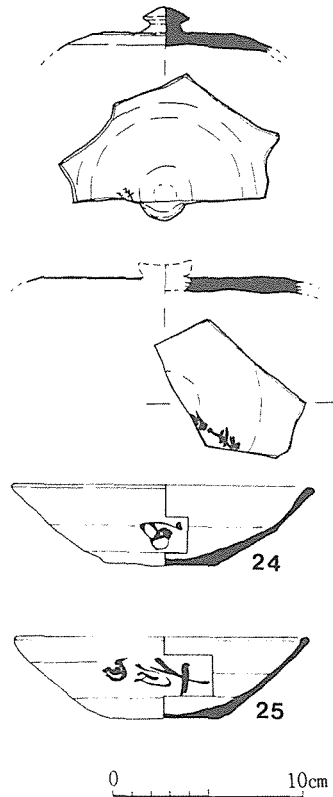


図109 宅原遺跡出土墨書土器

は、土師器や須恵器の小皿とともに青磁や白磁や碗が副葬品として出土しており、当時の葬送の風習を知ることができる。豊浦地区の井戸からは「有田」「中西」など人名を表すと考えられる文字や花押の書かれた墨

下小名田遺跡（北区八多町下小名田）

下小名田遺跡は武庫川の支流である八多川の中流域にあたる八多町下小名田に所在し、中世の大集落遺跡である上小名田遺跡の北側に近接する弥生時代～中世の複合遺跡である。近年の発掘調査では、特に、奈良～平安時代の遺構・遺物が数多く確認され、古代～中世において比較的規模の大きい集落を形成していたものと考えられる。また、出土遺物の中には、墨書土器、銅印、齋串、土馬、石帯なども含まれており、当時としては社会的地位が高く、官衙的要素をもった集落であることが窺える。中でも銅印は、奈良および平安期のものとしては、兵庫県下で六例（出土品四例、伝承品二例）あり、十二～十三世紀の遺物を含む包含層より出土している。印面の文字は漢字であれば「益」と読めるが、今のところ不明である。その他、墨書土器については、判読できたものとして「下」「天」「大南」と記されたものが出土しており、その中でも「下」は、和名類聚抄の郷名に出ている当地の名「下幡多」を示す可能性もある。

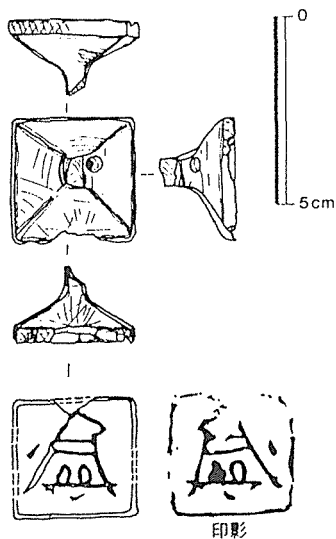


図110 下小名田遺跡出土銅印



写真250 掘立柱建物

上小名田遺跡（北区八多町上小名田）

上小名田遺跡は、武庫川の支流である八多川の中流域に位置し、標高約一九〇メートルの沖積地および河岸段丘上に立地している。この遺跡は、昭和六十一年（一九八〇）に六甲北有料道路の建設に際し発見され、発掘調査が行われた。その後、圃場整備事業や区画整理事業等に伴い、これまでに十数次の発掘調査が行われている。遺跡は、平安時代中頃から鎌倉時代にかけての大規模な集落跡で、特に道路建設及び区画整理に伴う調査では、南北約三〇〇メートル、東西約一〇〇メートルの範囲に掘立柱建物四九棟以上が検出された。

集落のはじまる十世紀後半頃には五〇メートル四方ほどの範囲に五棟の掘立柱建物が建てられ、同時に存在したのは三棟以内であったと考えられる。これらの建物はいずれも廂を持ち、そのうちの二棟は柱間九間×四間の大型の四面廂建物である。また当時では市内最大級の規模を誇る八間×五間の建物には、建築の際、地鎮のために皇朝十二銭のひとつである乾元大宝（初鑄天徳二年（九五八））二二枚が柱穴に納められていた。この時期の出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器の日常雑器のほか、緑釉陶器、灰釉陶器の施釉陶器が見られる。また、特異な遺物として、緑釉陶器の香炉蓋片や当時の貴族・役人の身分を表す帯飾りである石帯が出土している。この建物群はその規模や構造、出土遺物から、当地域の有力者の居館（屋敷地）であった可能性が高い。

続く平安時代末～鎌倉時代（十一～十二世紀）にかけては、飛躍的に集落規模が拡大していく。当遺跡の中でも、前時期の建物群の北東側微高地や旧河道（十一世紀頃に埋没）の低地を挟んで西および南西側へといくつかの単位で集落が形成されていく。このなかでも、平安時代の建物群の北側に隣接するように形成された建物群には、柱間五間×七間以上の床面積八〇坪を超える当時最大級の掘立柱建物が建てられている。遺物には土器類のほか、溝などから下駄・櫛・箸・鍬や木簡などの木製品が出土している。この時期に八多川流域の上流では附物遺跡・吉尾遺跡、下流域では下小名田遺跡・中遺跡などの集落跡が現れ、広範囲に村落が形成されていく。その中において、上小名田では継続して大規模な建物が建てられるなど、平安時代中頃から鎌倉時代に至るまで、八多川流域におけるこれら集落の中核となっていたことを物語っている。

淡河・萩原城跡（北区淡河町淡河・同萩原）

淡河町の中央を西流する淡河川沿いはかつて京・摂津と播磨を結ぶ主要なルートであった。淡河城、萩原城は一・五キロメートルを隔ててともに街道に面する淡河川左岸の段丘上に立地する。

淡河城は淡河町淡河に位置し、淡河川とその支流とにより形成された段丘の突端に立地する。段丘は南に広く、現在は水田と化している。城の主要部は段丘の北端に位置し、南に矩形の天主台と称される高まりを持つ「本丸」と土塁・水堀・空堀により区画され、本丸の西・南にし字形に取り付く「二の丸」の痕跡が現状で確認できる。「本丸」の東及び北側は垂直に近い崖となり、川面からの比高差は約二〇メートルで天然の要害となる。「本丸」「二の丸」に遺存する土塁は幅、高さとも一・五～三メートルの規模を有し、その外側に堀が廻らされる天主台と「二の丸」を画する空堀は現状で幅一〇メートル、深さ四メートルほどの規模

を有する。「本丸」内で遺構の残存状況を確認するための発掘調査を数次にわたり実施しているが、今のところ顕著な遺構は確認されていない。後世の耕作により大きく削られたものと推測されている。

築城年代は定かではないが、淡河氏の祖は北条一族とされ、鎌倉時代の初めには地頭職として淡河荘に補任、荘名を氏としたとされる。この頃には城が存在したものと推測される。

萩原城は淡河町萩原の淡河川に面する南側の段丘上に築かれた丘城である。城の立地する段丘先端には小開析谷が刻まれ、東縁は独立丘陵状となって淡河川に張り出し、ここに「本丸」(主郭)、「二の丸」(II郭)、「南丸」が南北に並ぶ。また谷を隔てた台地の西側には空堀と土塁により防御された「西の丸」や、「出丸」と呼ばれる突出部がある。台地南側には現在、境界を示す痕跡は認められないが、かつては東西に走る空堀と土塁があったと伝えられ、城域は二五〇メートル四方に及ぶものと推定される。台地と平地部の比高差は一六メートルであるが、台地周囲は淡河川とその支流が深く切り込んで急崖となり、自然要害の体をなす。

台地東縁に位置する「本丸」は東西三〇メートル、南北六〇メートルの矩形を体し、現在、雑木が茂る平坦面の周囲には高さ二メートルの土塁が巡り、南側は深さ五メートルに及ぶ堀切により小規模な郭である「南丸」と区画される。

「本丸」の北に位置する「二の丸」は東西一五〇メートル、南北一〇〇メートルの規模を有し、郭中で最も広く、平成五〜七年(一九九三〜九五)度の発掘調査では掘立柱建物・土坑・集石遺構・溝・堀・石垣が確認された。建物などの居住空間は郭北西部にあり、中央部は横矢や堀といった防御機能が備わる。逆L字形の堀は深さ約三メートルで、「本丸」と「二の丸」を画する。城への進入路は谷から直進したこの堀辺りと推定

されるが明確にはなっていない。

萩原城の築城時期については明らかではないが、当初は淡河荘の領主であった淡河氏の築城によるもので、鎌倉時代には存在したと考えられ、調査でも十三世紀の遺物が出土している。

天文二十三年（一五五四）には東の有馬郡から有馬氏が進出したとされ、さらに天正六（八〇）年（一五七八）の三木合戦の際は羽柴方の城として淡河城攻略に利用された。三木合戦における勝利に伴い有馬氏は淡河城を与えられ、天正七年萩原城は廃城に至ったとされる。廃城後は堀や谷が埋められ、急速に耕地化が進んだ状況が周辺

発掘調査からも窺える。

両城は三木合戦の前後にそれぞれ重要な役割を果たし、淡河城はその後、有馬氏の居城として一万五千石を領することとなる。かつての本町周辺には城下町が形成され、今でも旧道沿いには江戸時代の本陣跡が残り、往時の雰囲気を残す。淡河城は関ヶ原合戦の後、江戸幕府の一国一城の制により、元和三年（一六一七）に廃城となつたとされる。

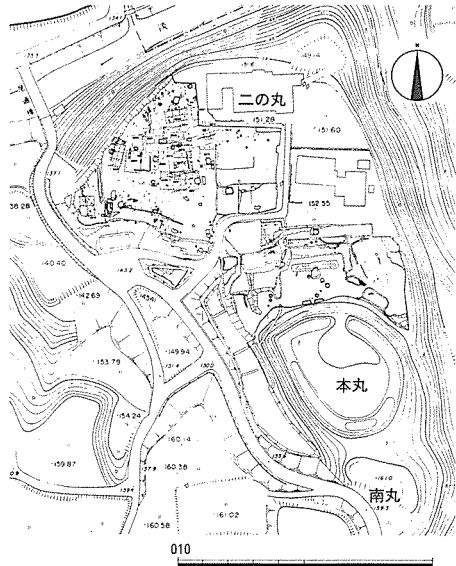


図111 萩原城跡（本丸・二の丸・南丸）

勝雄遺跡（北区淡河町勝雄）

勝雄遺跡は、加古川の支流淡河川の右岸の河岸段丘上の集落遺跡である。平成八年（一九九〇）度から土地改良事業に伴って発掘調査が実施され、弥生時代後期から室町時代の集落遺跡であることが判っている。特に平成九年度に実施した第三次調査では、淡河八幡神社の北側で、竪穴住居一四棟、掘立柱建物八棟、集落を区画していたと考えられる溝二条と奈良時代の掘立柱建物一棟が発見されている。

竪穴住居は、長方形に竪穴を掘り、北辺ないしは西辺に竈を設けている。一部の竪穴住居の竈周辺には、砂岩製の板石が発見され、竈使用時に用いられたと考えられる。また、竈と併せて屋内炉を設けた竪穴住居も発見されている。掘立柱建物は方形掘形を穿ち、二間×三間ないしは四間前後の規模で、束柱を設けない造りである。掘立柱建物の中には、竪穴住居が除却された後に建てられた建物や、竪穴住居が造られる以前に建てられた建物もあることから、竪穴住居と掘立柱建物が同時に併存していた可能性がある。

竪穴住居と掘立柱建物の時期は、七世紀初めから中頃と考えられる。一方、集落を区画する同時期の溝は、埋没後に再度穿たれた後、八世紀後半に埋まっていること、八世紀後半の掘立柱建物も一部見つかっていることから、勝雄遺跡は七世紀から八世紀まで断続的に営まれた集落であったと考えられる。

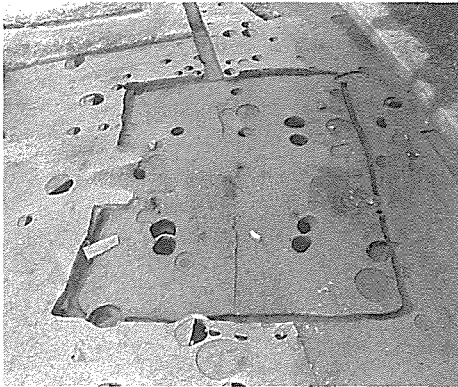


写真251 勝雄遺跡竪穴住居跡

箱木家住宅（千年家）（北区山田町衝原）

箱木家住宅は、吞吐ダム建設による移転に伴い、解体後、主屋の創建時期などを明らかにすることを目的として、床下の発掘調査が実施された。竈、厩は数度にわたる改修の痕跡が発見され、西側石積み下からは礎石、大壁の痕跡なども検出されたが、主屋の全面的な建て替えを示唆するような遺構は発見されなかった。なお、当初柱の礎石は黒褐色の盛土上に据えられていたが、この盛土直下で発見されたピットは主屋創建の

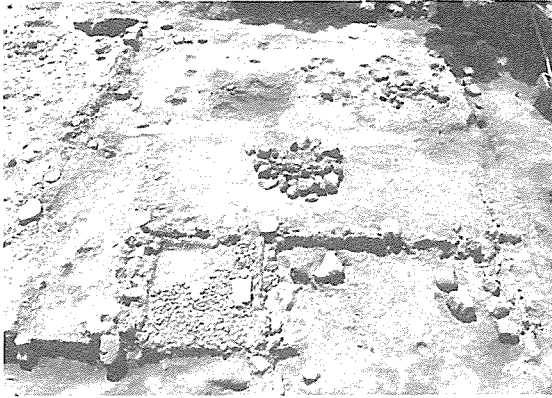


写真252 最下層離れ座敷建物跡（北より）

際の地鎮遺構とも考えられ、中には墨書須恵器が埋納されていた。この土器と西側雨落ち溝から出土した須恵質土器からすれば、主屋の建築時期が鎌倉時代（十三世紀）まで遡る可能性も考えられる。

千年家の新座敷と呼ばれる西側二室は、主屋とは時期を異にする建物であることは従来から指摘されていたが、発掘調査の結果解体前の千年家になるまでに四時期の離れ座敷が建て替えられていたことが明らかになった。最下層の建物跡は、江戸時代初期に廃絶されたと考えられる中世住宅である。礎石、同据え跡、小舞跡、掘立柱跡、壁土等の遺構とともに、囲炉裏跡付近からは、宋銭、陶器片等が出土した。南側に縁を持ち、囲炉裏のある広間を中心とした住宅と考えられる。

湯山遺跡（豊臣秀吉湯山御殿跡）（北区有馬町）

湯山遺跡は豊臣秀吉が自らの領地とした有馬温泉に建立した御殿の遺跡である。有馬温泉では、文禄五年（一五九六）に起きた大地震に伴って新たな地点で温泉が涌き出し、秀吉はそこに新たな湯屋や馬屋等を造らせたという記録が残る。この泉源は後に湯の涌出が止まるが（現在の極楽泉源は戦後新たに掘割されたもの）、その場所は名所となっていたようで、享保二年（一七一七）の『有馬山温泉古由来』にも「大かうのゆ（太閤の湯）」として記載されている。地元では現在までも極楽寺・念仏寺の境内が秀吉の湯山御殿跡であり、極楽寺庫裡奥床下にある石組みの壁をもつ地下室が湯殿跡であると言い伝えられてきた。

極楽寺庫裡は平成七年（一九九五）の阪神大震災によって罹災し、その再建に伴って事前の発掘調査が実施された。その結果、湯殿跡と伝えられた石組みの遺構は江戸時代のものであり、これ自体は湯山御殿とは関係ないことが判明した。しかし、江戸時代の二面の火災層が記録に残るとおり確認され、さらにその下層から安土桃山時代の湯屋に関連する遺構、また庭園跡が確認されたのである。湯屋に関連する遺構には、泉源・湯をひくためのパイプ（樋）・蒸し風呂・岩風呂などがある。庭園部分では池・植木の移植跡・小規模な建物の基礎等の遺構がある。池はその構造から茶の湯に使用する水をひき、ここで汲むためのものであると考えられる。また、庭園・湯殿の背後には加工した石材を用いない「野面積み」の石垣が高さ約七メートルにわたって積まれ、その上面は幅約五～一五メートルの平坦面（帯曲輪）となっている。この部分についても試掘調査を行った結果、帯曲輪の周囲では石垣上に巡らされる多聞と呼ばれる長屋づくりの城壁の基礎、帯曲輪の北隅では隅櫓状の建物の基礎の存在が確認され、湯山御殿の構造が重層的なものであることが判明

した。

出土した遺物には大量の瓦のほか、陶磁器類・碁石などがある。陶磁器類には花生け・茶壺・天目茶碗・向付・皿・徳利・杯・摺鉢などがあり、唐津・備前・丹波・志野・織部・瀬戸美濃など各地の製品のほか、中国製も確認されている。調査範囲だけでも一・五トン以上と大量に出土している瓦は、豊臣氏おかかえの瓦師の手になることが確認され、このことから、この瓦が葺かれた御殿の主が豊臣氏であることが確認でき、文献史料とあわせ、この御殿が秀吉のものであらうと推定できた。

現在この地に立つ極楽寺・念仏寺はともに徳川氏とかかわりの深い浄土宗で、極楽寺の本堂には徳川綱吉の母である桂昌院の奉納した厨子^{ずし}があり、棟には現在も三つ葉葵の御紋が輝く。出土した茶碗類から湯屋関連の遺構が埋められたのは江戸時代の初期と考えられるが、湯山御殿が壊されるのは政治的な理由が考えられる。すなわち、豊臣氏が滅亡し、徳川の世に入ると大坂城・伏見城・豊国神社など豊臣氏にかかわる建築物は徹底的に破却されることが知られている。湯山御殿も同様の運命をたどり、その上に浄土宗の寺院が建てられたものと考えられよう。とはいえ、湯山御殿は建物やその基壇など地上部分が解体された後、埋め立てられたため、考古学的にみると、かえって良好な状態で当時の遺構が保存されていたというのは歴史の皮肉だらう。

なお、これらの庭園及び湯殿関連遺構等ほとんどが調査終了後に埋め戻されているが、再建される庫裏の一階部分が太閤の湯殿館として整備公開されており、岩風呂の実物、蒸し風呂の実物とその復元模型、また出土遺物等が展示され、庭園も復元されている。

石峯寺経塚（北区淡河町神影）

岩嶺山石峯寺は神戸市の北端、京都・大坂から播磨以西に通じる湯山街道近くに位置する。法道仙人の開基伝承を持つが、寺観が整うのは鎌倉初期と見られる。永和元年（一二七五）銘のある木造地藏菩薩半跏趺下像をはじめ、中世に遡る彫刻・絵画・典籍などを有する真言密教の古刹である。

現在、石峯寺経塚と称されるものは、三重塔後方に位置する「龍ヶ峯」経塚と本堂西側の小山の二カ所である。後者は、同地より出土した東播系須恵器甕・瀬戸灰釉四耳壺・丹波壺等が寺に所蔵されており、経塚造宮を契機に形成された納骨墓群の可能性が高い。水輪に金剛界曼荼羅成身会の種子を刻む陶製五輪塔は、小山の南東裾から出土したとされ、納骨墓の供養塔とも考えられる。注目される資料として、中世丹波窯初期の作品とされる瓜蝶鳥刻文壺がある。肩部に、二つの実を持つ二枝の阿古陀瓜が対称に描かれ、その間に鳥を配し、二枝の瓜の下部には一方に枯れた木を、もう一方に蝶を描いている。経筒を収める外容器と考えられていたが、経塚と異なる場所から出土した可能性が高いことや、口縁部を意図的に打ち欠いていることから、蔵骨器として使用されたとも考えられる。この他、墨書法華経を納めた銅板製鍍金経筒が小山付近から出土している。

なお、永久五年（一一一七）の奥書を有する朱書法華経など重要美術品認定の「播磨国石峰寺経塚出土品」は、その後の検証の結果、石峯寺経塚出土資料とは認められないことが明らかになった。

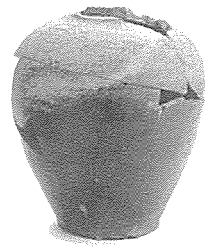


写真253 瓜蝶鳥刻文壺

勝雄経塚（北区淡河町勝雄）

勝雄経塚は、北区淡河町勝雄に所在し、高速道路建設に伴う確認調査で発見された。淡河町は六甲山系の北側に位置し、比較的広い盆地を形成している。縄文時代以降数多くの遺跡が確認されており、安土桃山時代には湯山街道が整備され、それ以降交通の要衝として栄えた。

経塚は、三木市との市境の山上の比較的眺望のよい場所に構築されていた。直径二〇センチメートル、深さ三〇センチメートルの素掘りの穴に、経筒を収納した外容器を立てた状態で埋納されていたと考えられる。経筒は備前焼と考えられる小壺に収められ、木製の蓋がされていた。経筒本体は円筒形で高さ一一・四センチメートル、直径四・七センチメートルを測る。銅製で、外面には薄く鍍金が施されてあった。筒身には、

「十羅刹女 播州住 良円

（バク）奉納大乘妙典六十六部

三十番神 享禄三年 吉月

と刻印されており、播磨国の住人良円という人物が廻国納経のために、享禄三年

（二五三〇）に納経したことがわかる。経筒の中には、法華経八巻が収められていた。

室町時代には六十六部聖と呼ばれる宗教者が各国を廻り、寺院などに納経を行っていたことは知られているが、経筒内に経典が残存している例は皆無である。そのような点から勝雄経塚は当時の経塚はもとより廻国納経の実態を示す資料として貴重な発見といえる。

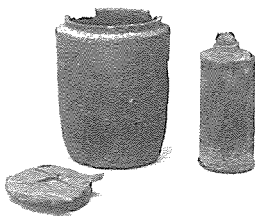


写真254 外容器と経筒